

vol. 14

C'n

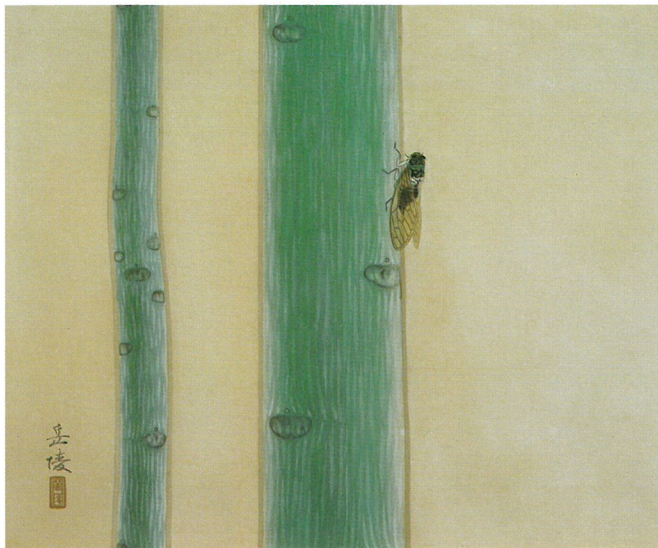
SCENE  
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART



夏ノ号

## 床しい人々からの贈り物



中村岳陵「青韻」千葉市美術館蔵（島コレクション）

私たちの住んでいるこの日本列島は、海あり川あり、山あり平野や盆地ありで、実に変化に富んでいます。その上に、春夏秋冬の季節の移ろいにも恵まれ、自然が人生に尽きせぬおおいを与えてくれるのは、まことに有りがたいことといえるでしょう。長い梅雨も、その後に訪れる夏空の爽快さを思い浮かべれば、なんとか我慢してやり過ごすこともできますし、その夏の盛りに突入しても、いつときの暑さと、かえってそれを楽しむことすらできるものです。

時候の推移に身と心とを合わせて暮らしていたついでこの間までの日本の家庭では、床の間の掛軸や、応接間や玄関などの壁上の額絵を、複数用意して折々に掛け換えることが、普通に行われていたものでした。訪れる客は、それらの絵によって、家風なり主人の趣味のほどなどを、うかがい知れたのでした。それだけに、うかつなものは飾れないと、絵の作者や主題の選択に気を配り、描きぶりの巧拙や見どころの有無に吟味を行き届かせたりと、好事の心を油断なく養う必要もありました。

昨年度、縁あって当美術館がご寄贈を受けることになった島コレクションは、そうした良き日本の暮らしの伝統が築き上げた、貴重な遺産と総括することができるでしょう。いずれ劣らぬ日本画の巨匠32人の、小品ながらも味わい深い逸品全46点は、例外なく季節の旬の詩情をたっぷり盛り込んでいて、なんとも味わいが深く、しみじみと心に沁みるものがあるのです。

いくつかの例をあげてみましょう。チューリップの根かたにつどう三羽の目白の姿がかわいい橋本明治の「春庭」、青い肌の

木の幹にとまる蟬一匹だけを描いた中村岳陵の「青韻」、紅葉した木々に彩られたおだやかな山並は東山魁夷の「深秋」、さらに冬ともなれば奥村土牛の「鴨」や山本丘人の「待春」が出番を待つという豪華さです。

これらの名画を、時の<sup>あんなばい</sup>塩梅を考え、自分の心持ちと相談して家の内のそこここに掛けては楽しんでいた床しい人のことが、つくづくとしのばれてなりません。本来のコレクターは寄贈者の亡き夫君の親友であった由で、その方が亡くなる際に島家に託された遺品を、このたび公共のためにとごぞって寄附されたというわけです。絵はおのずからふさわしい人の許に寄つてくるとよく言われますが、良き人々の手を介してついに当館へ預けられることとなったこの近代日本画の品々が、安住の所を得たと喜んでくれればよいのだがと、いささか不安ながらも願われるばかりです。

千葉市美術館も、早いものでこの秋に開館5周年を迎えることになります。千葉市民をはじめとして多くの皆様にご多大のご協力、ご支援を受けながら、ようやくよちよち歩きの第一段階を無事に終過することができたかと、今さらながら感慨深いものがあります。なかでも、開館以前の段階から始まっていた一般の方々からの美術作品のご寄贈は、実に力強く、また、館藏品に思いがけない広がりや豊かさを与えて下さるものと、感謝されてきました。

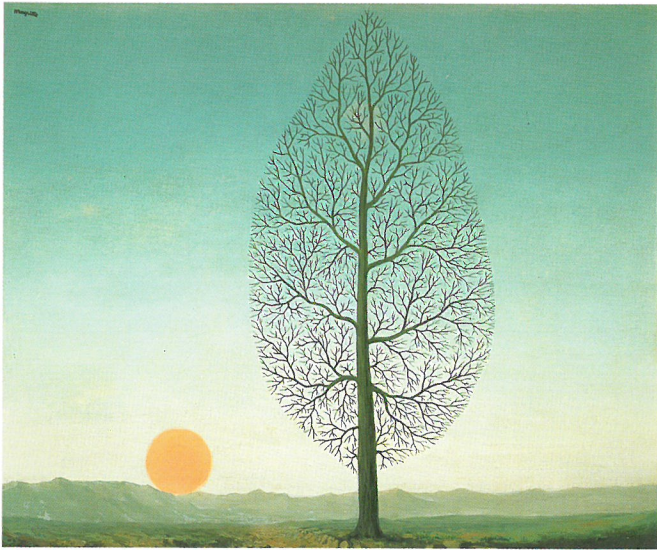
現在開催中の「寄贈作品展」は、島コレクションの受贈を契機として開催されたものですが、その他にもヨーロッパや日本の版画を幅広く集めた故布施俊夫氏のコレクションや、地元作家の無縁寺心澄氏や遠藤健郎氏の作品群など、多彩な内容を含んでいて、大変に見ごたえのあるものとなりました。

いうまでもなく美術館は、図書館とともに、近代の市民社会が獲得することを得た、かけがえのない文化施設です。美しいもの、心を養い育てるものを、誰しもが共有し、楽しむことができる公共施設です。この施設をより良いものとするために、お知恵やお力をお貸しいただき、一層の親しみを寄せて下さいますようにと、改めてお願い申し上げます。

「寄贈作品展」の会場には、これまで美術館には縁がなかったような方々までが、新聞やテレビなどのニュースで知ってお出でいただいているようです。そうした会場のなごやかな雰囲気に、慰められ、励まされているこのごろです。

千葉市美術館 館長 小林 忠

## ベルギー絵画—20世紀の巨匠展



ルネ・マグリット『絶対の探求』1940年

展覧会の監修者ミシェル・ドラゲ教授がカタログ論文の冒頭で述べているように、20世紀ベルギー絵画という枠組みを設定することには多くの困難が伴う。そもそもベルギーは、ワロンとフランマンという2つの言語、民族によって、2つの文化圏に分かれている国である。両者は完全に袂を分かつことはなかったが、様々な局面で対立した。国際的な文化交流が極めて盛んとなった20世紀ヨーロッパにおいて、一つの国の芸術をあえて括ろうとする試みは、ただでさえナショナリスト的な色合いを帯びる危険性をほらむ。ましてやベルギー人たちにとってベルギー美術という括りは、このような事情から、日本美術やアメリカ美術がもつ以上の特別な意味あいをもたざるをえない。

また、絵画という枠組みを維持し続けることは適切だろうか。今日絵画は、もはや数多くの選択肢のひとつにすぎないのではないか。1960年以前はともかく、それ以降の美術を扱うとき、絵画という枠組みはある種の拘束とならざるをえない。例えばこの展覧会では、絵画を平面と拡大解釈することでマルセル・プロタールやいくつかの写真作品を取り込んだが、パナレンコをはじめ幾人かの重要な現代作家を排除せざるを得なかった。

確かにベルギー絵画という概念は、ある種の困難を含み、便宜的なものにならざるをえない。しかし、こうして一つの地域の20世紀絵画史という俯瞰図を設定してみると、その文化が置かれていた状況を伺い知ることができてなかなか興味深い。ベルギーは古くから交通の要衝として栄え、20世紀初頭には、首都ブリュッセルからケルン、アムステルダム、(そして何より)パリまで、

鉄道を使えばほんの半日程度で行くことができた。文化の中心地に近すぎることは、必然的に外部からの影響を色濃く受けることを意味した。実際今回の展覧会も、象徴派にはじまり、フォーヴィスム、表現主義、未来主義、構成主義、シュルレアリスム、アンフォルメル、コブラ、コンセプチュアル・アートというように、ヨーロッパ美術の展開をほぼ忠実にたどっている。そして個々の画家たちの活動領域も、当然ベルギー国内に限定されず、周辺諸国にまで及んでいる。

けれども一方で、ベルギーの画家たちのなかにも、中央の様式の追従者に終わらない、強烈な個性の持ち主を少なからず見出すことができる。世紀末のフェルナン・クノップフ、ジェームズ・アンソール、レオン・スピリアルト、シュルレアリスムのルネ・マグリット、ポール・デルヴォー、コブラのピエール・アレシンスキー、コンセプチュアル・アートのマルセル・プロタールなどである。彼らはベルギーという一地方の枠に収まらない、魅力的な画家たちである。その多くが、パリ、ニューヨークを中心に語られたこれまでの美術史ではどちらかというとき低く扱われてきた感否めないが、近年は少しづつ高い評価を得るようになってきた。今回、出品作のちょうど半数がこれら7人の画家たちの作品で、展覧会の中核としての役割を果たしている。

彼らの作品は大胆かつ個性的でありながら、過激さ、極端さはそれほど感じられない。時として静かで穏やかでさえある。ミシェル・ドラゲは、このようなベルギー美術の傾向を、前衛文化の持つ急進性に常に警戒感を抱き続けてきた結果であると分析する。ヨーロッパの先鋭的なモダニズムとは異なるゆるやかな歴史が、ベルギーの美術には流れているようだ。20世紀美術はとかく難解で分かりにくいと言われるが、マグリットやデルヴォーをはじめとするベルギー絵画は、一般的に親しみやすいと言えるだろう。日頃この時代の美術を敬遠しがちな方々も、彼らの作品を通して、ぜひこの機会に20世紀絵画の魅力に触れていただきたい。

本館学芸員 水沼啓和

## 『土門拳—日本の彫刻』によせて



飛鳥寺（安居院）金堂 釈迦如来坐像面相詳細 7世紀前半（飛鳥時代）

今回の『土門拳—日本の彫刻』展は、飛鳥から鎌倉・南北朝時代までの約850年間に生み出された仏教彫刻約80点を130カットの写真で紹介するものです（うち2点は室町期）。

これは、展覧会の名称からおわかりいただけるように、ふたつのねらいがあります。

ひとつは、現在実物によって展覧会を開催することがほとんど不可能なわが国の彫刻のあゆみを写真によって紹介すること。そしてもうひとつは、土門拳（1909—90）という現代を駆け抜けたひとりの写真家の仕事を回顧することです。

つまり、この展覧会は土門拳というひとりの写真家の「眼」による日本彫刻史入門であり、案内なのです。

\*

日本の彫刻を写真で撮影する、ということのみは写真の草創期、下岡蓮杖（1823—1914）やその弟子である横山松三郎（1838—84）のころからあり、博物館・文化財保護行政の中心的役割を果たした蜷川式胤（1835—82）によって見ている光景がそのまま定着されるという驚きにとどまらず、「記録」という観点が強く打ち出されるようになりました。

その後、奈良・京都にある古美術を専門的に撮影する写真家も現れるようになります。

工藤利三郎（精華・1858—1929）は1891年に奈良に移り住み、数多くの彫刻を撮影した最初の写真家として知られ、大正期になると大阪朝日新聞に勤務していた小川晴暘（1894—1960）がやはり奈良の古い彫刻にレンズを向けています。

特に小川は、工藤の視点が好事家的な傾向に傾きがちだったこととは異なり、ほんらい画家志望だった体験から、彫刻の雰囲気までも写真に定着させようとした。これは、撮影される対象の再現性にこだわっていたそれまでの写真の性格から、「表現としての写真」という領域に一步踏み込んだものといえます。この写真に注目した會津八一（1881—1956）の勧めもあって小川は新聞社を退職して奈良に居を構え、美術写真の専門店である飛鳥園を創立します。1922年のことでした。

以後、飛鳥園は昭和のある時期まで、日本の古美術を学ぶ学生や研究者たちが奈良を訪れた際には必ず訪れるべきところとなりました。

おそらく、飛鳥園の店先に立ったひとびとにとっての必読書は和辻哲郎（1889—1960）の『古寺巡礼』（1919）であり、1940年代になると會津八一の『鹿鳴集』（1940）や亀井勝一郎（1907—66）の『大和古寺風物誌』（1943）がこれに加わります。和辻たちの著作を視覚的イメージに変換したのが小川の写真だった、そのように言うことができるでしょう。

しかし反面、小川が撮影した彫刻の写真は、イメージ重視のあまり彫刻が備えている造形性や質感が喪われてしまっていることも事実です。たとえば、彼が得意とした「レンブラント・エフェクト」と呼ばれる、半逆行で、漆黒の背景から彫刻を浮かび上がらせる手法ではこの傾向が顕著です。

1940年代に本格的なものとなった土門拳が撮影した彫刻の写真は、このような小川の限界を乗り越え、対象の構造を把握し、写真の特質である記録性を損なうことなく撮影者の視点を強く打ち出すものでした。

土門にはそれまでの写真家たちとは大きく異なるセンスがありました。それは、ロダン以降の近代的な彫刻についての理解があった、ということです。

ある彫刻の持つ特徴を捉えようとする時、土門は小川とは異なり、彫刻を彫刻たらしめている内部の構造や力のバランスが把握できるように光を当てています。

おそらく、この発想は土門が高村光太郎（1883—1953）のエッセイを読んでいたことなどが考えられますが、それ以上に荻原守衛（碌山・1879—1910）の作品を1943年に集中的に撮影した体験がより重要なものとなっていたようです。

\*

會津八一の愛弟子で、飛鳥園の創設時から小川晴暘を助けていた安藤更生（1900—70）は1952年に、土門拳の写真についてつぎのように評しています。

…小川さん以後の人達は勇敢に写真そのもの、美術そのものへ突貫した。昭和15年頃から始めた土門拳さんの仕事など、その代表的なものだろう。土門さんは平安初期の彫刻が好きだが、それを対象とした作品の中でも、特にデタイユ（ディテール）を撮ったものによい作品が多い。刀の切れ味を生かそうと努めたこの時代の彫刻は、土門さんのレンズに捉えられて、人の気のつかない生気をみなぎらせている。

全身ものでも、唐招提寺の無頭の如来形など、不思議にこの像は仲々カメラを受けつけない像で、この像の持味を再現した写真を見た事がないが、土門さんの作品は充分私を満足させてくれた。  
(安藤「古代彫刻の写真作家たち」)<sup>1)</sup>

古くは工藤利三郎の写真をはじめとして、大和路の彫刻を撮影した数多くの写真を見続けていた安藤のこの評は、公平なものでしょう。

安藤のこぼれを基に改めて考えると、工藤や小川たちとは異なった位置に立つ土門の基盤は、彼が彫刻と向かい合った時、すでに報道写真家として活動していたことが重要な理由として考えられます。

小川までは、いわゆる写真館で撮影される写真術を表現の基礎としており、「記念」や「記録」といった視点はカバーすることができても、「報道」の視点、特に1936年に創刊されたアメリカのグラフ雑誌「ライフ」によって世界中に広まった、アクティヴな「決定的瞬間」を捉えることには限界がありました。

土門のばあいは、ごく初期こそ写真館で修行していましたが、すぐに辞め、報道写真に飛び込んでいます。新しい世界で彼が学んだ写真における内面性とは、小川のように写真家の文学的感興を印画紙上に再現・定着させることではなく、対象に潜む時代の精神をいかに自覚的にレンズによって切り取るか、という意識のありかたでした。

\*

ところで、古い彫刻を撮影することがどうして「報道」なのか疑問に思われる方もいらっしゃるにちがいません。報道写真とは、事件や事故といった今日的な、社会のできごとを撮影することではないのか。

果たしてそれだけでしょうか。

たれにも気づかれず、ひっそりと寺社に眠っていた古い彫刻のすばらしさ。その彫刻を制作したのは同じ日本人であり、わたしたちと同様、笑い、苦しみ、時には怒り—つまりは生きていたわけです。そして、彫刻のすばらしさと共に、彫刻とい

う「もの」のなかからそれを生み出したひとびとの精神をカメラでも捉え、広く人々に伝えることも、やはり「報道」に違いありません。このことは土門拳みずからが同じようなことをたびたび記し、発言しています。

さらに、このことは単に報道の領域に止まらず、「歴史」をどのように理解・把握し、学ばなければならないか、という要諦でもあります。

歴史（学）はたんに過去のできごとを年代順に並べるだけのものではありません。なぜ歴史を学ぶのか。それは、今に生きるわたしたちが、過去のできごとから現在を批判・検証する視点を得るために他ならない。過去を過去のままに止めるのではなく、そこから現在を見出すこと。ただし、これは決して文学的な、ロマンティシズムの領分ではありません。かりに、そのような気分を前提にすると、過去との対話（ダイアログ）ではなく、過去をダシにした一個人の独白（モノログ）に陥ってしまうからです。独白を蓄積し、あらたな展望を開くことは不可能であり、本来の意味に於いての批評にもなり得ない。

思い出されるのは、土門が古い彫刻の撮影を開始していた1930年代末から40年代にかけて、清水三男（1909—47）の『日本中世の村落』（1942）や石母田正（1912—86）の『中世的世界の形成』（1946）など、わが国の中世史研究に新しいページを開いた研究が上梓されていることです。ふたりの研究に共通しているものは、古文書の行間からかすかに聞こえる声に耳を傾け、自分たちと同じ人間の姿を捉え、復元しようとする真摯な姿勢です。これは、土門が彫刻に向けた視線と同じものでした。

石母田はその序文にこう記しています。

…本書において庄園の第一義的問題は地代や法の問題ではない。庄園の歴史は私にとって何よりもまず人間が生き、闘い、かくして歴史を形成してきた一箇の世界でなければならなかった。  
(石母田「初版序」)<sup>2)</sup>

本展覧会に展示される土門が撮影した彫刻の写真から、それぞれの彫刻のすばらしさはもとより、各時代のひとびとの「生き、闘い、かくして歴史を形成して」いった息づかいを感じていただけるのではないかと。担当者としてはそのように思っています。

1) 安藤更生「古代彫刻の写真作家たち」『美術手帖』1952年9月第60号 pp.[48]-53

2) 石母田正「中世的世界の形成」岩波文庫 1985年 p.13

# ミュージアム・ショップのご紹介

1階ミュージアムショップでは、美術図書やポストカードを中心に多数のグッズを取り扱っております。  
今回は、この夏涼風を運んでくれるミュージアムグッズをご紹介します。



日本の美術品から絵柄をとったうちわや扇子は、この季節一番の人気商品です。  
種類も豊富で、実用としてはもちろん、鑑賞用としてもお楽しみいただけます。

●うちわ ¥1,500



ポストカードの中には、暑中見舞いにちょうどいい絵柄が揃っています。  
デザインがユニークで、美術がもっと身近に感じられます。  
これで親しい人へのご挨拶が、ひと味違ったものになることでしょう。

●ポストカード ¥77

●「長澤蘆雪展」会期中のショップ風景



その他ガラス工芸品、Tシャツやハンカチなど涼しげなグッズもあります。  
この夏、日常生活にアートを取り入れてみてはいかがでしょうか？  
また、美術館の企画展に併せて、ディスプレイも変えております。  
そのときの期間限定で取り扱っているグッズや書籍もありますので、ぜひ、お見逃しなく。



人気の鳥獣戯画グッズのコーナーが充実しています。  
なかでも、可愛い刺繍の入ったミニタオルは、うさぎとかえるの2種類。  
小皿と汲出しはそれぞれ5種類あり、動物たちの遊ぶ様子が心をなごませてくれます。  
ショップでは贈り物用にラッピングを承ることができます。

●扇子 ¥2,500 / ミニタオル ¥600 / 小皿・汲み出し各 ¥800

## 千葉市美術館ミュージアム・ショップ

- 営業時間と定休日は美術館と同じです。
- お問い合わせ ミュージアム・ショップ TEL : 043-221-6885

## 展覧会スケジュール

【休 館 日】月曜日（祝日の場合はその翌日）年末年始 展示替期間中

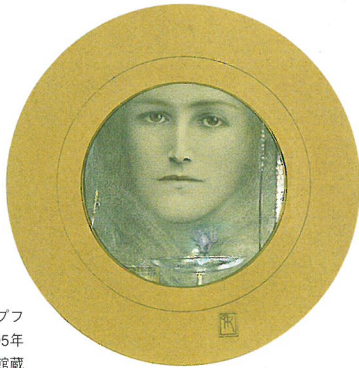
【開 館 時 間】午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）毎週金曜日は午後8時まで（入場は午後7時30分まで）

【ハローダイヤル】043-227-8600

※展覧会の日程・名称は変更される場合があります。なお、企画展の入場料は展覧会ごとに異なります。詳しくは美術館までお問い合わせください。

### ◆寄贈作品展 島コレクション・布施コレクションを中心に 7月30日㊤まで

千葉市美術館はこれまで多くの皆様のご協力に支えられてきましたが、とりわけ、貴重な美術作品を御寄贈いただくという、ありがたいご支援も頂戴して参りました。今回は、多彩な国内外の版画による布施コレクション、そして昨年度寄贈いただいた近代日本画の島コレクションを中心にご紹介しております。



フェルナン・クノッフ  
『褐色の瞳と青い花』1905年  
ゲント市立美術館蔵

### ◆ベルギー絵画 — 20世紀の巨匠展

7月22日㊤ — 8月27日㊤

ヨーロッパ北西部に位置するベルギーは、国土的には小さい国ですが、古来より交通要衝の地として栄え、ヨーロッパの政治・経済のみならず文化的にも大きな役割を果たしています。本展は個性豊かなベルギーの芸術のなかでも、わが国になじみの深いクノッフ、アンソールをはじめ、マグリット、デルヴォーを経て現代に至る絵画を通覧するものです。

### ◆土門拳 — 日本の彫刻 9月5日㊤ — 10月15日㊤

『ヒロシマ』、『筑豊のこどもたち』などで知られる写真家・土門拳（1909—90）は、その生涯に日本の彫刻を数多く撮影し、その対象は古代の土偶・はにわから現代の彫刻にまでおよんでいます。今回は、飛鳥時代から鎌倉・南北朝時代にかけての約850年の間に制作された彫刻の中から、各時代を代表する国宝・重文をはじめとする約80点を130カットの写真でたどります。



薬師寺金堂  
薬師如来坐像  
7世紀後半（飛鳥時代）



菱川師宣『天人採蓮図』千葉市美術館蔵

### ◆菱川師宣展（仮称）

10月24日㊤ — 11月26日㊤

菱川師宣（～1694）は、安房国保田（現・千葉県鋸南町）の出身で、江戸において風俗画のジャンルに新風を吹き込み、浮世絵派の祖と仰がれている絵師です。当館では師宣ゆかりの地である千葉に立地する美術館として、開館記念展の「喜多川歌麿展」以来、浮世絵派の紹介に力を注いで参りました。そこで開館5周年を迎える今秋、師宣の全容とその魅力を紹介する展覧会を開催します。



月岡芳年『風俗三十二相 うれしさう 明治稔間當今藝妓之婦宇曾久』  
大判錦絵 明治21年(1888)

「三十二相」とは、本来仏教の用語で、仏がそなえている32の優れた身体的特徴を意味する。これを女の多様な魅力になぞらえることは、文学上では古くから行われていたが、明治を代表する浮世絵師月岡芳年は、様々な女の姿を、階級や時代設定を変えながら、それぞれに「…さう」と題して、32図の美人画シリーズに完成させた。このうち本図は、明治時代当時の芸者風俗によって描き出した「うれしさう」な女の姿であるという。

美しい墨ぼかしで表された暗闇の中には、螢が丸い光を放って浮かぶ。芸者は、白い肌が透けて見える薄物をまとった夏姿であり、真紅の艶かしい唇に団扇をくわえ、今まさに飛んできた螢を手囲いにしたところであるらしい。女の姿態、風に吹かれる遅れ毛や袖が、その大事に合わせられた両手を中心にめぐるような動きをもって描かれる。あふれるうれしさを、無邪気な動きの中にとらえながら、なお強くあくどい色気を放つ芳年らしい美人顔が印象的である。

一体、この女の嬉しさの理由とは、単純に螢を手に入れたことにあるのだろうか。

螢は恋の象徴である。古来恋の情念を比喻して螢火は歌に詠まれ、また江戸時代以降、夏の螢狩りは男女が夜のデートを楽しむ格好の遊びでもあった。女の手の中には、恋の成就の証しが捕らえられたのであり、恋の喜びこそが「うれしさう」の理由なのである。

本館学芸員 田辺昌子

美術館のご利用あんない

◆ NTTハローダイヤル 043-227-8600

**1-2階** SAYA-DO HALL  
さや堂ホール

昭和初期に建設された、市内に残る数少ない貴重な建物（ネオ・ルネサンス様式）を新しい建物で包み込み、復元・保存したものです。

**1階** MUSEUM SHOP  
ミュージアム・ショップ

展覧会カタログ・美術図書、ミュージアムグッズがお求めになれます。

**7階** AV CORNER  
映像コーナー

ハイビジョンによる作品鑑賞、所蔵作品の検索ができます。また、千葉市美術館制作の番組をご覧頂けます。

**10階** ART LIBRARY  
図書室

室内の美術図書はご自由にご覧になれます。また、美術書の検索に関するご相談をうけたまわります。

[開室時間] 10:00~18:00

**11階** RESTAURANT  
レストラン

ランチタイム・喫茶にご利用下さい。

[営業時間] 11:00~21:00

■ JR 総武線千葉駅

- 東口より徒歩約15分
- 京成バス大学病院行または南矢作行（のりば⑦）「大和橋」下車徒歩約2分
- 千葉都市モノレール県庁前行「葭川公園」下車徒歩約5分
- 無料巡回シャトルバス「チーバス」（のりば⑨）「中央区役所・美術館前」下車（11:05~18:35の毎時05分と35分に出発・水曜運休）

■ 京成千葉中央駅東口より徒歩約10分

